

コラム

みやちゃん と ご一緒体験記

Vol.31

【生きてゆく私たち ～「死んだ人」は(も)生きている～】

先日(3/24)、初めて眼科を受診しました。「いい病院」と評判のその病院はコロナ対策がバッチリで、すごく待たせられましたが安心したせいか不思議にイライラしませんでした。雑誌などの読み物はないし(コロナ禍中はそういう営業スタイルが多い)自身ももってきていないため、暇をもてあましスマホをあれこれいじっていたら、オリンピック金メダリストの古賀元柔道選手の訃報をしり大変驚きました。53歳、がん闘病の末の死ということで、私も家族をがんでなくしたせいかショックでした。

スポーツ選手は見た目上、がっちりした体型で鍛えているため病気にまけないイメージをもたれがちですが実際はそうでもないようです。知っているだけでも、がんで生命を落としたスポーツ選手は多くいます。人生百年の時代に、50代での死去は惜しまれますが、「人は病気ではなく寿命で死ぬ」という説もありますから運命なのかもしれませんね。ともあれ、心よりお悔やみ申し上げます。

愛する人を失うことは身を切られる思いですが、失った後も生きている者の時間は続きます。自分の人生のメインキャストだった人がいなくなるわけですので、そう簡単にストーリー変更はできないものです。これは大事な人を失った多くの方たちが直面する通過点ですから、時間という薬が効くのを待つしかないようです……。仕事とはいえ在宅医療で多くの(特に)高齢者をみている“みやちゃん”は、これまで幾つもの死をみえています。

過日、亡くなった私の家族が望んでいた自分史をようやく作り終え、生前お世話になった方々に送ったところ、多くの方から感想つきのお手紙を頂戴しました。すべてが温かい言葉ばかりでしたが、中でも印象に残ったものがあります。

「人は二度死ぬといえます。一度目は肉体が減んだ時。二度目は人々の記憶から忘れ去られた時。○さんのおことは自分を含めて誰もが忘れたことはなく、これからも忘れたくないと思っています。だから、彼は生きています。死んではいません」。

……とありました。

「がんばってください」

「〇〇さんの分までしっかり生きてください」

「〇〇さんの分まで幸福になってください」

「前向きに生きてください」など、

時々、かけられる言葉がとても重く感じることもありましたが、この言葉の力はすごく大きいと感じ嬉しかったです。

残された者にとって、逝ってしまうとすべてが無くなったように感じ、その人との時間が存在したのかどうかさえ分からなくなってしまうものです。最後まで生きることをあきらめず病氣と壮絶に闘った人をみているとなおさら。こんなに一生懸命に生きたのに、関わった方たちが、そこに存在しなかったように忘れてしまうことは残酷そのものなのです。

少し前、WOWOWで鑑賞した日本映画「記憶屋 あなたを忘れない」という作品では、生きていくにはあまりにも辛すぎる記憶を消す能力をもつ人間が存在します。この記憶屋さんは、ある日、がんで死にゆく弁護士から、可愛い娘の頭の中から自分という存在を消して欲しいと依頼されます。本当は娘の記憶の中で永遠に生き続けたいと願っていますが、幼い娘を悲しませたくないという親心からです。切ないですよね……。

干渉に浸っておりましたら、春秋社のwebマガジン「はるとあき」に連載中の「女に産土はいらない」（著者/三砂ちづる）の記事（「死んだ人」は生きている）を興味深く読みました。メキシコの「死者の日」をモチーフにした映画のことに触れていて、死んだ人=生きている、と思える理由が面白く胸にすんとおちてきました。関心をお持ちの方は是非アクセスしてみてください。

年忌法要、お墓参り、お盆、お彼岸。故人を思う機会（時間）があり続けられない限り、死んだ人は生きているんですよ！ そう思えることで、今という瞬間を大切に生きようという意欲に繋がります。

★「記憶屋 あなたを忘れない」 <https://eiga.com/movie/90454/>